

## 小林秀雄教材の今日的意義

高野光男

二〇一三年度センター入試で小林秀雄の「罅」<sup>つば</sup>が出題され、国語の平均点が大幅に下がったことが新聞紙面を賑わした。その一つに、漱石研究で知られ、『教養としての大学受験国語』などの著書もある石原千秋氏の「意義を欠いた好みの押しつけ」という見出しのついた文章（『産経新聞』二〇一三年二月一八日付）がある。石原氏は、「罅」における小林の主張には「いかなる根拠が示されるわけでもなく」、「根拠のない文章は好みの押しつけにすぎない」と批判し、大学入試問題には「高校までの学習が身につけているか」、「大学に入学してから研究ができる能力があるか」を確認する二つの意義があり、「いずれの観点からも失格である」と出題者を断じている。

石原氏の主張は、入試問題という観点からの正論だと思われる。だが、小林秀雄教材の価値・可能性について考えるとき、より重要なのは、石原氏が「高校国語の教科書の編集委員だったときにも、小林秀雄が山崎正和に、さらに中村雄二郎に取って代わられるようになって、最後まで小林秀雄を採録することを主張したほどである。ただし、『かつてはこれが評論だった』という、文学史上の標本としてである」と述べている点であろう。「文学史上の標本」と石原氏は否定的なニュアンスを込めているが、私はこの「標本」を「古典」と読み替え、

そこに小林秀雄の国語教科書教材としての積極的な意義を見ている。

現行高校評論教材の主なものは言語論・身体論・メディア論など、言語論的転回以降の思想状況を基盤として成立したポストモダンの文章である。ポストモダンの限界が指摘され、ポスト・ポストモダンの模索が課題となっている現在、ポストモダンの発想をどう超えるかという観点から小林秀雄は読み直される価値があるし、少なくともポストモダンを知るためにはモダンの理解は欠かせない。

江藤淳は『作家は行動する』（一九五九年）で、芸術作品をはじめとする一切の文化活動を「物」と捉えた小林を、実体論として痛烈に批判したが、それは「ことばはもの、ではない。一種の記号である」（傍点は原文）という立場からであった。つまり、先駆的ポストモダンからのモダン批判といってよいのだが、知られるように、江藤は二年後の『小林秀雄』で評価を一変させなければならなかった。小林のいう「物」は「フォーム」「姿」「文体」「実感」「絶対言語」などと言い換えられている概念であり、「美を求める心」では「言葉を使って整えて、安定した動かぬ姿にした……」という文脈の中で登場している。この、言葉に対する「実感」は近年、茂木健一郎によって「クオリア」として再評価されている。単なるモダンへの回帰ではなく、新しい文芸批評の創造という小林秀雄の批評的営為のジャンル特性を捉えつつ、現代の思想・文化の相対化という真の意味での「古典」としての読み方が要請されているように思う。

（たかのみつお・東京都立産業技術専門学校）